

『入試必携 英作文 Write to the Point』 の改訂版刊行によせて

竹岡 広信

◇謝辞

『入試必携 英作文 Write to the Point』（以下、『必携英作文』）は、これを使用した学生が、高校を卒業しても、この本と決別することなく、常に携帯して役立てて欲しいという願いを込めて「必携」という名前をつけました。2007年にこの本を世に送り出してから、15年の歳月が流れました。この本をご支持頂きました全国の先生方のおかげをもちまして、この度、三度目の改訂をする運びとなりました。先生方を対象とした予備校の教員セミナーでも、この本に関する質問をなされる先生が増えました。非常にうれしいことなのですが、同時に、執筆者としての責任の重さを感じております。今回の改訂を機に、先生方から頂戴しましたご意見やご質問をしっかり反映させ、さらに充実したものにしようと努力しました。

◇本冊の改訂

1. 〈Review Check 110〉の新設

生徒の基本的な誤りを少なくするために、導入的要素として、英作文に役立つ簡単な文法・語法の確認問題(2択問題)である〈Review Check 110〉を巻頭に設けました。

5年前の三訂版発行によせた本誌の記事に、『中学校で習っているから大丈夫』という時代ではなくなりました。themselves を theirselves とする生徒、my own country を own country とする生徒、挙げればきりがありません。there is / are ～も、もう一度再教育することにしました」と書きました。

英作文の添削をされている先生ならお気づきだと思いますが、ここ数年の生徒の英作文の基礎事項の欠落は、目を覆いたくなる状況になってきています。

先日その後輩の先生から、「高校3年生の英作文の添削をしていると、bad の比較級として badder が数多く出てきました。一応辞書には俗語としては掲

載されているのですが、どのような指導をすればいいですか」と尋ねられました。私は「君たちの英作文には badder がお似合いだと言えばいいじゃないですか」と笑いながら言いましたが、後輩は困っていました。

私自身、国公立大学を志望している高校3年生の英作文を毎週毎週数百枚単位で英米人の協力を仰ぎながら添削してきました。ここ5年ぐらい、10年前にはありえなかったミスが、毎回、毎回出てきます。

「3人称単数現在のsの脱落」や「動詞の活用変化の間違い」などでは、もう驚かなくなりました。それに、そうした生徒に対して「ケアレスミスには注意なさい」とも言わなくなりました。というのも、He have ～と書く生徒は、そもそも「3人称単数現在のs」という概念さえない可能性があるからです。東京大学、京都大学などの志望者に対して、「3人称」とは何かを教えるはめになるわけです。maked や goed などを見ても「またか」と思うようになりました。He is child. [正しくは He is a child.] なんて序の口で、He is children. などもゴロゴロ出てきます。「everyday はくっつけると『毎日』の意味の形容詞、『毎日』の意味にしたければ every day と2語で書くこと」という発言を年間に何十回やっているかわからないぐらいです。

このような状況を少しでも改善しようと、4月の最初の授業日に、「間違えてはいけない基本事項200」を2択問題にして生徒に配付したところ、間違いが劇的に減りました。採点をするイギリス人からは、「いったいどのような魔法を用いたんだ?」と言われたぐらいです。この経験から、『必携英作文』にも「間違えてはいけない基本事項200」を〈Review Check 110〉という形で本冊に載せることにしました(本冊で扱うポイントを厳選した結果、200 → 110 という中途半端な数字になりました。編

集部からはキリのよい100という数字が提示されたのですが、どうしても110のポイントは譲りませんでした。〈Review Check 110〉を本冊の巻頭に置いたのは、「このチェックポイントがクリアできていない人は、先へ進んではいけない」という気持ちからです。ご使用の先生方も、『必携英作文』の授業を本格的に始められる前に、〈Review Check 110〉のテストを行って、全員が満点をとれるまで粘り強くご指導いただければと思っています。

2. 「自由英作文」の充実

今回の改訂により、「自由英作文」に割くページを増やし、説明を充実させました。各課に収録していた Further Exercises で使用可能なものは「自由英作文」の章に移動しました。つまり、本冊の中での自由英作文の比重を上げたと同時に、本冊とは独立した章立てとして、生徒が自学自習できるものに変えたのです。

自由英作文を入試で出題する大学は年々増加しています。旧帝国大学(北海道大学、東北大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学)でさえ、自由英作文を出題していない大学は皆無になりました。このような傾向を踏まえ、自由英作文に関する記述を充実させたわけです。

もちろん自由英作文といえども、ベースに和文英訳の力がなければ、絶対に対処はできません。その意味では和文英訳の必要性に変化はありません。しかし、「自由英作文を書くための作法」を教える必要は確実に高まっています。本書では12ページにわたり、タイプ別の自由英作文の書き方の指針を出しました。

3. 各課の授業のポイントを動画で配信(指導者用)

『必携英作文』の本冊も詳解も、「こうして授業していただきたい」「こういうことを重点的に授業で取り上げていただきたい」という熱い思いで執筆していますが、やはり紙媒体の限界があります。

予備校の教員セミナーでも英作文の授業を長年担当してきましたが、アンケートに「『必携英作文』をどのように授業されているのか、実際の授業を見せてほしい」という声が多数寄せられていました。さすがに予備校で、他社の出版社の本を扱うわけにもいかないので、困っていました。そんなときに、

数研出版の方から「『必携英作文』の授業を数研セミナーの動画で配信しませんか」と言われて、これぞ「渡りに船」ということで快諾しました。各課の導入として「何に重点を置き、何を話せばよいのか」を動画に撮り、数研セミナーで視聴していただきました。これをもとに構成した解説動画を本書4訂版のご採用校の先生にもご覧いただけます。(2022年12月末配信予定です。)

この動画を見ていただければ、「竹岡の思い」と「竹岡の願い」が先生方にダイレクトに伝わり、授業方針が明確になると思います。時には「暑苦しいぐらいの熱量」で説明をしている箇所があり、お見苦しい場合があるとは思いますが、その点は「竹岡の教育への熱い願い」からのことだと、ご容赦ください。

◇詳解の改訂

本冊各課冒頭の解説ページの「執筆意図」を説明

詳解の各課冒頭に、「執筆意図」を載せました。動画で「授業方針の概略」を説明し、「執筆意図」では、『必携英作文』の本冊には載せなくてもスペースの関係で載せられない解説を追加しました。たとえば仮定法の項目では、「〈if+S+should V〉を取り上げていないのはなぜですか?」などの質問も数多く寄せられました。この質問の背景にあるのは、「現在のことは『仮定法過去』で表し、未来のことは〈if+S+were to (V)〉あるいは〈if+S+should V〉で表す」という「常識」だと思われます。実際には、未来のことは「仮定法過去」で表すことが可能です。〈if+S+were to (V)〉は、仮想世界のことを述べる場合に用いられます。よって、たとえば「あなたは今、無人島に1人しているとします。島からは何が見えますか」などの性格占いなどで使われます。約40年続いた共通一次・センター試験の時代の文法問題では、追試験でただ一度出題されただけです。〈if+S+should V〉は、ホテルのフロントなどの掲示で「もし不都合な点があれば、フロントまでお電話ください」といった「そのような事態は起こらないとは思いますが、もし起きた場合には」という文脈で使われます。共通一次・センター試験の時代の文法問題での出題は、追試も含め(おそらくは長文も含め)一度もありません。よって、『必携英作文』には掲載していないのです。

「執筆意図」では、このような楽屋裏の話も載せています。

◇新刊『EXERCISES B 学習ノート』発行

従来より先生方から、「『必携英作文』はよい本だということは知っているが、私の学校の生徒では EXERCISES B が難しすぎる」という声を多数いただいていた。また、先生によっては「EXERCISES B を書くためのヒントと方針」などのプリントをお作りになっておられる方もいらっしゃいました。

そこで数研出版の方から『入試必携 英作文 Write to the Point EXERCISES B 学習ノート』の企画の打診がありました。私は「生徒の負担にならない安価なものにするなら賛成です」と述べたところ、生徒に手頃な値段で作っていただけることになりました。

大気中の二酸化炭素の量が増えていることが、地球温暖化を引き起こしている。[中央大]

(新版：1 主語の決定(1))

この文は、文字通りには「大気中の二酸化炭素の量が増えていること」が主語となるため、that 節を主語にしてしまう生徒が多く、さらに the amount of ～が使えない生徒や、「引き起こしている」の時制を間違える生徒も多くて、「採点にうんざりする問題」です。そこで、『EXERCISES B 学習ノート』では、次のような指針を載せました。

[文の骨格]

①[大気中の二酸化炭素の量]+②[増えている]+③[そのことが]+④[地球温暖化を引き起こしている]

①は、the [number / amount] of ～のどちらを使えばよいだろう？

②は、現在形、現在進行形のどちらが適切だろうか？

③は、[and it / and this /, which] のどれが適切だろうか？

④は、現在形、現在進行形のどちらが適切だろうか？「地球温暖化」には、冠詞が必要だろうか？

このように、おおまかな骨格を示すことで、「どこから手をつけたらよいかわからない」という生徒を救い、また、1つ1つのポイントに指針を示すことで、生徒自らに考えさせるようにしました。しかし、いくら生徒に「英作文の力がない」といっても、あまり過保護にしてヒントを出しすぎると、生徒から「書く喜び」を奪うことになりかねません。よって、そこは慎重に慎重を期しました。

◇本冊・解答の徹底的な見直し

1. 本冊につきまして

この本を世に出した当時は、「非常によい本ができた」と密かに確信していました。しかし、改訂を重ねるたびに、それまでには気がつかなかった不十分な点や改善すべき点が見えてきたのです。

私自身もこの本を授業で使い初めて 15 年になります。生徒の解答を添削する中でわかったことは、「生徒がよく間違えるポイント」＝「本冊の解説が不十分な箇所」ということでした。たとえば、「目的の表現」の EXERCISES に、〈so that S will V〉を使って「～するために」を英訳する問題がありますが、これを実際に生徒にやらせてみると、現在時制にもかかわらず、〈so that S would V〉と書かれた答案が数多く出てきました。「なぜかな？」と思って、よくよく本冊の例文を見ると、過去時制の例文になっていました。我々教員の目線からすれば、過去時制では would を使い、現在時制では will を使うのは「自明」なのですが、生徒の側に立てば必ずしもそうではないわけです。「譲歩の表現」の EXERCISES では、「どんな仕事についても」を英訳する問題があるのですが、これをやらせてみるとできません。またまた本冊を見ると、whatever の記述はあるのに、whatever が名詞を従える場合のことが書かれていないのです。

「本冊の解説が不十分だと生徒はミスをする」ということを改めて肝に銘じて改訂に臨みました。

また、EXERCISES で扱う問題も、「現行のものより学習効果が高い良問である」と判断した場合に限り、差し替えることにしました。今回の改訂では、第 1 章～ 18 章の EXERCISES A, B の和文英訳の問題のうち、約 2 割を差し替えています。新規採用予定の問題はすべて生徒に解いてもらい、どのようなミスが出るのか、生徒にとって役立つ表現が入っ

ているかなどを総合的に判断して決定しました。また、現行の本冊のポイントの見直し、および EXERCISES で扱う問題の順番の入れ替えも行いました。これらすべては「さらに使いやすくよい本にする」ためのものです。

2. 解答につきまして

『必携英作文』の解答方針は、「たまたまヒットする英作文からの脱却」です。

今回の改訂では、さらにそれを明確にしました。「野球をする」は play baseball, 「ミスをする」は make a mistake, 「努力する」は make an effort ですが、「ヨガをする」は do yoga です。この中で「する」=do になっているのは最後の例だけです。do a mistake や do an effort とは言いません。このように、「～」+「する」といった要素ごとに切り分けてそれぞれ英訳するのは最悪のやり方です。中学では「犬が好き(「犬」+「好き」=like dogs)」のように、そもそも目的語に対して汎用性の高い動詞から教えるために、要素ごとに切り分けて英訳する生徒が多いわけです。

繰り返しますが、英作文では「コロケーションを知っているもの」以外は使うべきではありません。「状況を判断する」はどうでしょうか。「状況」=situation+「判断する」=judge でよいのでしょうか？ひょっとしたら「当たっている」かもしれませんが、コロケーションを知らないとすれば、そうした答えを書いてはいけないわけです。〈decide+疑問詞節〉という汎用性のある表現を用いて、decide what is happening now とすればよいわけです。judge the situation というのが、たとえ英語として正しい場合であっても、そのような答えが「日本語との偶然の一致によるもの」であることを生徒には力説する必要があるわけです。

先日高校2年生に「言語は思想を支える」という文を英作文させたところ、大半の生徒が support thoughts と書いていたので泣きそうでした。1年間「知らないものは使うな!!!」と言ってきましたが、まだまだ足りないようです。「動詞の語法」の〈enable+O+to (V)〉を用いて、Language enables humans to think. と書くべきです。

今回の改訂に際しては、このような「偶然の一致による答え」に対しては、従来以上に注意を喚起す

るようにしました。

また、生徒の答案に自動翻訳を使ったと思われる解答が多くなったので、それに対応できるように、生徒がよく使っていると思われるいくつかの自動翻訳サイトに問題文を入力し、その結果を参考にして、解説に追加しました。

◇その他の改訂ポイント

QR コードで音声提供

例文音声は、現行本でもダウンロード提供する形でご用意はしていたのですが、ダウンロードの手間がかかって不便というご指摘をいただいていた。そこで、今回の改訂では QR コードで音声聞けるようにしました。さらに、模範解答の音声も用意しました。

例文や模範解答を耳から聞いて、定着させてください。

◇結び

これからの英作文指導に求められるものは、「翻訳者のまねごとのような難語を用いた英作文の解説」や「気の利いた格好いい英語表現の紹介」ではなく、「確実な英語で、言いたいことをおおよそ伝えられる力」「海外に出しても恥ずかしくない、論理的でミスのない論文を書ける力」を生徒につけてやることです。

そして、「英語が話せる」ためには一定のパターンプラクティスだけでは不十分です。「言いたい日本語を瞬時に、自分が確実に言える英語に落とし込める力」が何よりも重要です。「まともな英会話」の基礎を身につけるためにも、良質な和文英訳の適切な指導の一助として、新しくなった『必携英作文』が皆様のお役に立てることを切に祈っております。

(駿台予備学校講師, 学研プライムゼミ特任講師,
竹岡塾主宰)